

## ヌーリー家とカージャー朝初期のファールス地方

長谷川久美

【要約】一八世紀末、カージャー朝下のイランでファールス地方知事に赴任した王子の在任期間は三十年以上に渡ったが、その末期には政治的の大事事件が相次いだ。この動乱期を考察する前提として、それに先立つ時期の概況を把握する必要があるが、史料の制約が厳しく、ほぼ手付かずの状態になっている。よって本稿では王子と共に赴任したヌーリー家の動向を通して、ファールスの地域社会の描写を試みた。ヌーリー家はカージャー朝勃興期以来の功臣を輩出した家系で、知事の近衛兵集団を率いて赴任、同家の一人が知事に次ぐ地位に就くなど非常に繁栄した。その背景には知事との緊密な関係と中央で築いた信用があると考えられる。しかし彼らの地元住民掌握は脆弱であった。ファールスの中心都市シーラーズの住民は、自らと地方政庁の接点となる役職の人選にヌーリー家を介入させず、直接には地元有力者の影響下にあった。一方遊牧部族の中でカシュカーイーが台頭、その有力者はヌーリー家の地方政庁内の地位を脅かし、ついにカシュカーイーを中心とする遊牧部族は、ヌーリー家をファールスから排除するまでに勢力を伸長させた。

史林 七五巻六号 一九九二年一月

## はじめに

一八世紀後半、Aqā Mohammad〔没年一二二一／一七九七〕の精力的な征服活動により成立したQajar朝<sup>①</sup>は、彼の死後、甥のFath'Ali Shāh〔在位一二二二／一七九七～一二五〇／一八三四〕に引き継がれた。一方イラン南部のFars地方は、アーガー・モハンマドに倒されたZand朝の本拠地であったため、交替する二王朝の争乱の舞台となり、Zand朝崩壊後は、同地方の知事が兄ファトフ・アリー・シャーに反旗を翻し混乱が続いた。しかし反乱鎮圧後の一二二四／一七

九九一八〇〇年、ファトフ・アリー・シャールの王子 Hosein 'Ali Mirza がファールス知事に就任し、この地方におけるザンド朝末期以来の目まぐるしい政権交替とは対照的に、シャー没後の一二五〇／一八三五年まで三〇年以上に亘り、その地位に留まった。

このホセイン・アリー・ミールザーの赴任を以て、ファールスの混乱は収束したかに見えた。だが彼の在任期間末期には、遊牧部族の他地方への大量移住、彼自身の中央に対する反乱と大きな政治的事件が相次いで発生し、再びファールスは混乱する。この新たな動乱期を考察するためには、それに先立つ時期の政治的・社会的情勢の概要をつかんでおかねばなるまい。ところがホセイン・アリー・ミールザーの在任期間、特に一二四〇年代半ば／一八二〇年代末までに関しては、本来ファールスの事件を中心に記されるはずのファールス地方史にすら、この地方についての記述が乏しい。そのためこの時期のファールス地方を検討することは難しく、管見の及ぶ限り、一九世紀前半のファールスを論ずる一環として、ホセイン・ミールザー在任期間全体にも触れた Davies 氏の考察があるのみである。<sup>②</sup>

ところで、ホセイン・アリー・ミールザーがファールスに赴任する際、カスピ海南岸の Mazandaran 地方の Nir を出身地とする Zehi 家の人々が、彼に同行したことが知られている。ファールスのヌーリー家に関してはほとんど研究されていないが、<sup>③</sup> 同家の Mohammad Zaki Khan が実権を握ったためホセイン・アリー・ミールザーは聾のようであったと夙に言われており [SKZI, 29]、彼が政治的有力者であったことが指摘されている。地元ファールス出身者と異なり中央から派遣されたため、ヌーリー家に関しては、中央で編纂された史書を利用する余地があり、ある程度まとまった情報が得られる。そこで本稿では、ヌーリー家のファールスでの動向を通して、ファールスの地域社会の状況を可能な限り描きたい。さて考察は以下の手順で行う。初めにカージャール朝との関係からヌーリー家の性格を概観し、次にファールス地方政庁での同家の動向、ファールスで活躍する同家と中央との関係を考察することにより、ファールスにおけるヌーリー家の立場を明確にする。そして最後に以上の結果をふまえ、同家とファールスの地域社会とが直接接触した事件を取り上げ、

そこに現れる社会の特徴・変化を捉える。

ファールス及び同地のモーリー家に関する情報を提供してくれるペルシア語史料は、ファールスの地方史・地誌である *FN* と年代記 *NS* である。*FN* の著者の誕生は一二三七／一八二一二年であるからやや後代の史料になるが、彼が地元出身者である点に価値がある。*NS* は中央に視点を置いた史書であるためファールス関係の記述は *FN* より更に少ないが、ホセイン・アリー・シールザーのファールス赴任の頃生まれた著者は、少年期・青年期をファールスで過ごしたので、この地に関する記述は史料価値が高い。<sup>⑥</sup> これらペルシア語史料から得られる情報量は乏しいが、欧文史料によってその欠を補う。この欧文史料には二種類ある。一つは旅行記、もう一つはペルシア湾岸の Bushahr の Resident に滞在したイギリス人が残した報告書である。史料の性格上、ファールス史という観点から見れば、欧文史料の情報は断片的であるが、即時性はペルシア語史料より遙かに高い。考察に当たっては、多くの場合、主としてペルシア語史料に拠るが、個々の検討項目について利用可能な欧文史料があればその記述も確認するという方法を採用している。

史料番号

- FN*: Hāji Mirzā Hasan Hoseini-ye Fasā'i, *Fārsnāme-ye Nāseri*, ed. M. R. Fasā'i, 2 vols, Tehrān, S. H. 1367.
- FO*: United Kingdom Foreign Office, Public Record Office, *Correspondence from the Residency at Bushahr*.
- Fraser*: J. B. Fraser, *Narrative of a Journey into Khorasan in the Years 1821 & 1822*, repr. Delhi, 1984.
- Jones*: H. Brydges-Jones, *An Account of the Transactions of His Majesty's Mission to the Court of Persia in the Years 1807-11*. Tehran, 1976.
- MN*: Mohammad Hasan Khān E'temād al-Saltane, *Tārikh-e Moutazam-e Nāseri*, ed. M. E. Raḡvāni, 3 vols, Tehrān, S. H. 1363-7.
- Morier 1*: J. Morier, *A Journey through Persia, Armenia, and Asia Minor, to Constantinople, in the Years 1808 and 1809*. London, 1812.
- Morier 2*: J. Morier, *A Second Journey through Persia, Armenia, and Asia Minor to Constantinople, Between the Years 1810 and 1816*. London, 1818.
- NT*: Mirzā Mohammad Taqī Lesān al-Molk Sepehr, *Nāseri al-Tawārikh Salāfin-e Qājāriye*, ed. M. B. Behbūdi, 4 vols, Tehrān, S. H. 1353.
- Onsley*: W. Onsley, *Travels in Various Countries of the East: More Particular Persia*, 3 vols. London, 1819.
- Rubino*: H. L. Rubino di Borgomale, *Mazandarān and Astarābād*.

London, 1928.

RŞ: Reḡā Goli Khan Hedāyat, *Tārīkh-e Roudat al-Şajā-ye Nāserī*.

IX, X, Tehrān, S. H. 1339.

SHZ: 'Abd Allāh Mostoufī, *Şah-e Zendeqānī-ye Man yā Tārīkh-e Ejtemā'ī va Edān-ye Doure-ye Qājārīye*. 2 nd. ed. 3 vols. Tehrān, S. H. 1340.

ŞT: Mohammad Ḥasan Khān E'temād al-Saltane, *Şadr al-Tevārīkh yā Tārīkh-e Şodūr-e Qājār: Şah-e Ḥāt-e Yezdah Najār az Şadr-e Aẓamā-ye Pādeşāhī-e Qājār*. ed. M. Moshiri, 2 nd. ed. Tehrān, S. H. 1357.

T.A: 'Aḡod al-Doule Solṡān Ahmād Mirzā, *Tārīkh-e 'Aḡodī*. ed. 'A. Navā'ī, Tehrān, 2535SH.

TM: Mohammad Taqī al-Şar'ī, *Tārīkh-e Moqāmmadī*. ms. British Library Add. 27243.

參考文獻

Adamec 1976: Adamec, W., ed. *Historical Gazetteer of Iran vol. I*

*Tehran and Northwestern Iran*. Graz, 1976.

Arsar 1333: Arsar, K. *Tārīkh-e Bāfi-e Qadīmī-ye Siltāz*. Tehrān, S. H. 1353.

Bakhash 1971: Bakhash, S. "The Evolution of Qajar Bureaucracy: 1779-1879." *Middle Eastern Studies* 7(1971), 139-168.

Bakhash 1985: Idem, "Administration in Iran I The Safavid, Zand, and Qajar Periods," *EI* I.

Bāmdād 1963: Bāmdād, M. *Şah-e Ḥāt-e Rejāl-e Irān*. 3rd ed., 6 vols, Tehrān, S. H. 1363.

Beck 1986: Beck, L. *The Qashqā'ī of Iran*. New Haven and London, 1986.

Davies 1987: Davies, C. E. "Qajar Rule in Fars Prior to 1849,"

*Iran* 25(1987), 125-153.

EZ: *The Encyclopaedia of Islam*, new edition, Leiden.

EI: *Encyclopaedia Iranica*. London, Boston and Henley

Lambton 1970: Lambton, A. K. S. "Persia: The Breakdown of Society," *The Cambridge History of Islam*, I, ed. P. M. Holt, Cambridge, 1970.

Lambton 1974: Idem, "KĀDĀR", *EI*².

Meredith 1971: Meredith, C. "Early Qajar Administration: An Analysis of Its Development and Functions," *Iranian Studies* 4 (1971), 59-84.

① カーニヤーン朝の成立年代については一七七九年一七八六年一七九六年を様々な言われている。「小牧昌平」「チンギス朝の成立過程について——一八世紀イラン政治史の諸問題——」『土曜シンポジウム』第五号(一九八七)四三三。

② Davies 1987, 125-130. インドヤヌス氏はホギン・ロー・マーン「一時代のノーマンズ」地方政庁の「royalism」の発現としての視点から論じている。その「しかく」ゆらゆらと十分な説明をなす独自の時代区分が用いられた「意味を明確にたかみかねる語」(例を採「the spirit of Fars」)ゆらゆら「論議をたかみかねる」。

③ インドヤヌス氏は本稿で彼が Nurī olan の没落と言及しているが、ローリー・クランソンのように論じているものがある。その意義を読者はわかっている [Davies 1987, 125-129]。マールヌスで活躍したローリー家の研究は「意見の及ぶ限る」Bāmdād の人名事典 [Bāmdād 1363] のを参照。

④ 旧版本 [Tārīkh-e Fārsnāme-ye Nāserī, 2 vols, Tehrān, A. H. 1314] 及びその複製 [H. Busse (tr.), *History of Persia under Qajar Rule*.

New York & London, 1972] も参照した。FN II は大阪外国語大学の岡崎正孝、Hashem Rajabzade 両氏を中心とする研究会で取り上げられ、同研究会に私も参加し、両氏から様々な御教示を頂戴した。  
 ⑤ FN の著者については前掲訳書のフッセによる解説 [v]、RS の著者についてはバームダーの人名事典 [Bandad 1363, II, 39-42] 参

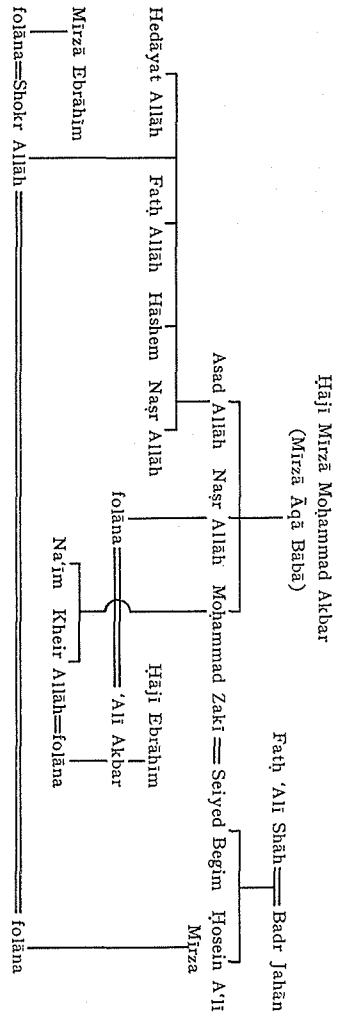
照。FN、RS などカージャール朝時代の主なペルシア語史料とその著者については岡崎正孝氏による紹介がある（岡崎正孝「カージャール朝史ペルシア語史料解題」『オリエンツ』第二五巻第二号（一九八二）七四一—八七）。

## 一 ヌーリー家の政治活動

### (1) ヌーリー家とカージャール朝

ヌーリー家の出身地は、FN に拠れば、カスピ海南岸の Mazandaran 地方にある Nur の一八の地区 (mahall) の首邑 (qasabe) Balade である [III, 975]。アーガー・モハンマドの征服活動は、一一九三—一七七九年にザンド朝の人質としてのファールスでの生活から逃れた後、大まかに記せば、マーザンダランなどカスピ海南岸の地方の征服、一二〇〇—一七八六年の首都 Tehrān 制定、イラン中央部、更にファールスなど南部の征服という過程をたどった [Lambton 1974, 39]。彼がザンド朝を倒したのは一二〇九—一七九四年である。ヌール征服の時期は明確ではないが、一一九四—一七八〇年のカージャール族の内紛はヌールの人々を巻き込んでいるから、この時点までにカージャール族の勢力が及んでいたであろう。一一九八—一七八三—四年にザンド朝軍がマーザンダランに進攻した際ヌールの有力者がザンド側について、この戦いでカージャール側が勝利を収めると [RS IX, 180-186; MN III, 1392-1394]、以後ヌールの人々がアーガー・モハンマドと鋭く対立する事例は見られなくなる。従って一一九八—一七八三—四年頃、アーガー・モハンマドのヌールに対する支配が確実になったと考えられる。

ヌーリー家の祖先について RS は、シーア派のイマームとの関わり、Safavi 朝、Nāder Shāh のもとの活躍を伝え



ナーラー家系図 RS [X. 717-8, X. 367-8], FN [I. 727, 740 II. 976, 978], T'4 [I. 28, 316] をもとに作成。"folāna" は名前不明の女性を表す。

るが、この記述は同時代史料によって裏付けられず信用し難い。本稿冒頭で言及したモハンマド・ザキ・ハーンや以下で述べる Asad 'Aliāh Khan の父親 Hajji Mirza Mohammad Akbar [通称 Mirza Aqa Baba] は政治的支配者に仕えず、ザンド朝時代には以前同家が保持していた Rostamdar の統治権も他家に移った [RS X. 366-369]。カーシヤール朝勃興前後、ヌーリー家の政治的影響力は強力ではなかったであろう。

アーガー・モハンマドの勢力がマーザンダーンに及ぶと、彼のもとでハージー・ミールザー・モハンマド・アクバル [「ミールザー・アーガー・バーバー」] の息子アサドッラー・ハーンが活躍を開始する。彼がアーガー・モハンマドに仕え始めた時の状況は、諸説あって定かではない。それらの説によるとその時期は一一九四—一七八五年、一一九八—一七八三—一七四四年、一一九四—一七八〇年であるから、いずれにせよヌールにおいてアーガー・モハンマドの支配が確実になった頃までだと考えられる。そして主な任務は軍の財務で、その地位は Iashkarnevis と呼ばれている。その後のアーガー・

モハンマドの軍事活動の規模を考えると、アサドッラー・ハーンの任務は非常に重要なものであったと言える。<sup>⑨</sup>

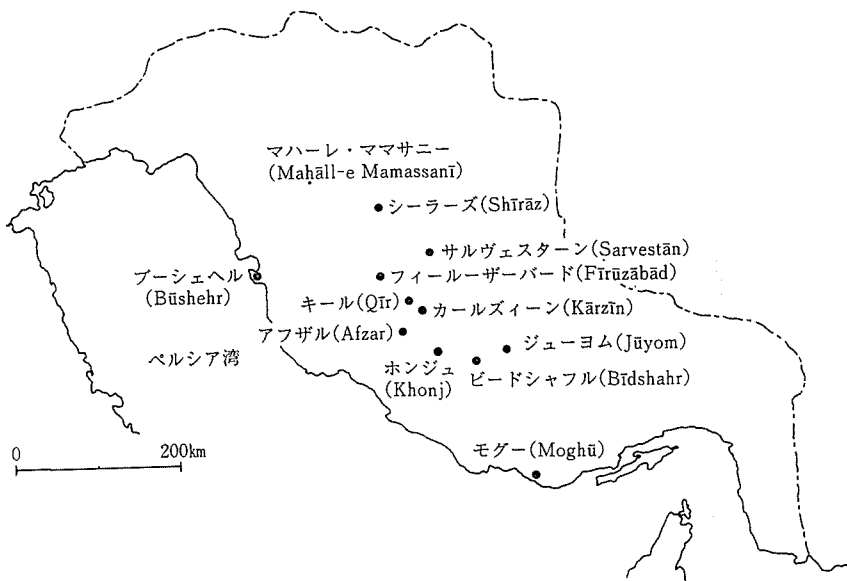
ファトフ・アリー・シャー時代になっても、軍の財務担当官としてのアサドッラー・ハーンの立場に変化は無い。一二三八／一八二三年の記事で軍の財務の高官若しくは長官 (ashkan-e vishsht) 、一二三九／一八二四年の記事で同長官 (vazir-e ashkar) として言及されており、<sup>⑩</sup> 軍の財務担当者として出世していったことがわかる。一二四五／一八二九一三〇年、彼はロスタムダールとその周辺地方、そこに暮らす二つの部族の統治権 (hokumat va eyalat) を得て [FS X, 369] 中央政界を引退したとみられる。

アサドッラー・ハーンの息子には、ファールスで銃兵の指揮官 (sarkarde) として活躍した Shokr Allah 以外に、財務官、書記、ファトフ・アリー・シャーの妻のワジールがおり、<sup>⑪</sup> 全体的傾向としてヌーリー家は文官を輩出するタイプの家系であった。<sup>⑫</sup>

以上の考察から、ヌーリー家の出身地ヌールは、アギー・モハンマドの征服活動の比較的初期の段階でその支配下に入り、その頃からヌーリー家のアサドッラー・ハーンは彼のもとで活躍を開始したことがわかる。アサドッラー・ハーンは活発な軍事活動を展開したアギー・モハンマド、その後継者ファトフ・アリー・シャーの時代を通じて、軍の財務を担当する要職を占め、その息子たちも概ね文官として活動を始めていた。ヌーリー家は、カージャー朝勃興期以来、その支配に貢献していたのである。そしてこのことはファールスを活動の舞台としたヌーリー家の性格にも影響したと考えられる。

## (2) ヌーリー家とファールス地方政庁

それではファールスのヌーリー家の考察に移ろう。本節では、同家の地方政庁内での地位、ホセイーン・アリー・ミールザーとの関係について検討する。まず彼らがファールスの中心都市 Shiraz に来た時の様子を伝える FN の記述を引用



ファールス地方略地図

FN II 所収の地図及び FN II の記述、テヘラーンの Gitāshenāsi 社の地図 “Īrān”, “Fārs Shirāz” をもとに作成。但し境界線はカージャール朝初期のファールスの範囲ではなく、FN II でファールスとして言及される地域のおおよその範囲を示す。

す  
の。

ファールス地方の統治 (hokmrāni va famānāvāri) が高貴で気高いホセイーン・フリー・ミールザー・カージャーイル閣下に定められた。数人の永遠なる国家の役人達 (omānā) が、信頼され信任され、ヌールの十八の地区 (mahāli) から八百名の銃騎兵 (tolāngchi-ye jarīde) を選び、アーガー・バーバー・ハーンの息子達をアミールの中のアミール Nasr Allāh Khān とキョンムド・ザキー・ハーン、ラシュカルネヴィース・バーシーのアサドッラー・ハーンの真の息子 (valad al-sedq) でアミールの中のアミール Hājī Shokr Allāh Khān 及び各人が地位保持者 (sāheb-e mansabi) である彼らのいっしょ (bani arman) と部族 (ashīrati) から成る集団が、上述の閣下に従ってテヘラーンからシーラーズに到着した。そして二年間のシーラーズ滞在ののち、その集団の家族 (ahl va ‘ayal) がアーザンダラーンのヌールの諸地方 (navāhi-ye Nur) から来い、その [Darshāzāde の] マンハン (街区) の一部で政庁の内城 (Ark-e divāni) に隣接するモルデスターン通り (gozar-e Mordestān) に居を定めた。<sup>④</sup> [中略]そしてこの時期、ヌールの集団 (jamā‘at-e



Nuri) が各由、家を自分の地位に応じて建て定住した [II, 976]。<sup>⑤</sup>

この記述よりアーガー・バーバー・ハーンの息子〔即ちアサドッラー・ハーンの兄弟〕ナスロッラー・ハーンとモハンマド・ザキー・ハーン、それにアサドッラー・ハーンの息子シヨクロッラー・ハーンは、首邑バラデだけでなくヌール各地から集められた銃騎兵の集団を率いてシーラーズに來たことがわかる。そこで初めに、彼らが率いたこの集団がいかなる集団であるかを調べていく。以下この集団をヌーリー集団と呼ぶ。

まず形式的な特徴から検討する。ヌーリー集団の構成員は、ヌーリー家とその他とや部族であるが、「部族」が具体的にどのような紐帯でヌーリー家と結び付いていたかは不明である。集団の人数は FN では八百と記されているが、RS と NT では一千 [RS IX, 717; X, 368; NT II, 39]、イギリスの全權使節 Jones の私設秘書として來た Morier の旅行記 *Morier* 1 では七百である<sup>⑥</sup>。ヌーリー集団の裝備については FN の著者は銃騎兵と述べているが、一二三二—一八一七年のファールス南部への遠征にも、ヌールの銃兵 (tofangchi) の参加が確認できる [RS IX, 554; FN I, 715]。欧文史料ではどのように記されているだろうか。Morier 1 に拠れば一八〇八年当時、対ロシア戦に刺戟されイランでは軍備を整える動きがあり、ホセイン・アリー・ミールザーもロシア人捕虜に教練させて新しい軍隊を創設するよう命じられた。しかし「この時シーラーズには、マーザンダラーンのヌール地方 (Bolouk or Perganah) の頑健で活動的な七百名の男たちから成る別の部隊 (body) があって、彼らは同様にロシア式教練の規律に従い、あご髭を落とし、使い慣れていた火繩銃 (matchlock gun) を火打石銃 (firelock) に替え、すっかりロシア兵の装いをすることになっていた。Mohomed Zeky Khan [キーンマド・ザキー・ハーン] と Sheik Roota Khan [シヨトロッラー・ハーン] が彼らの指揮官 (commander) に任命された。」〔30〕その後のヌーリー集団の裝備の変化は不明だが、イギリスの特命全權大使である弟に同行して來た Ouseley は一八一一年五月、モハンマド・ザキー・ハーンの家を銃兵 (tufangchi) が大勢居る様子を目撃している [Ouseley II, 192-193]。以上よりヌーリー集団は七百から一千名程の銃騎兵 “tofangchi-ye jaride” で、当初は火繩銃を持っていたことがわか

る。

では彼らはいかなる性格の集団であったのか。シーラーズに来た当初、ヌーリー家の指揮官 (sardar) はアサドッラー・ハーンの兄弟ナスロッラー・ハーンであったが [FN I, 676, 740; II, 976]、FN I に拠ればシーラーズ到着の三、四年後、FN II では一二一五—一八〇〇一年に彼は没し、その地位はアサドッラー・ハーンの息子シヨクロッラー・ハーンに与えられた。しかし彼はまだ一二歳であったので、モハンマド・ザキー・ハーンが後見人の地位 (niyabā) に定められ実質的な後継者となり [FN II, 976]、ホセイーン・フリー・ミールザーの御前「ナラーム (gholām-e pishkhedmat) の地位を得た。この時代の「ナラームとは近衛兵を指す [C. E. Bosworth, "GHULĀM in Persia", *EFJ*]. またヌーリー集団移住の二年後、家族もシーラーズへ来て定住したが、その場所が政治の中心、宮廷 (palace, Divān-Khanah) のある内城 [Onseley II, 181] に近いモルデスターンであり、RS ではヌーリー集団を「私的銃兵 (tofangchi-ye khasse)」[X, 368] と表現していることも、彼らの近衛兵としての性格を示唆する。一八〇八年の年末にシーラーズ近郊に到着したモリーアらは、五〇名のヌーリー集団から成る騎馬隊に出迎えられたが [Morier I, 97]、この事実もその裏付けになるであろう。

一八世紀末及び一九世紀初めにイランを訪れたイギリス人 Malcolm は、シャーが三千から四千名程の騎兵で構成される「近衛兵 (royal guard)」である「ナラーム (gholām)」を持ち、王子たちも同様の装備、仕事を持つ近衛兵の「ゴラーム、即ち私的護衛兵の小集団 (a small body of Gholams, or "personal guards")」を抱えていたと記す。そしてイランへの軍事援助のため滞在したフランス人 Drouville の記述に拠れば、このシャーの近衛兵にも "Gholams" と "Gholams-Toufangchis" の二種類があり、ともに騎兵であるが、前者が騎兵銃「カービン銃」(carbine)、「ピストル (pistolet)」、剣 (sabre) を武装していたのに対し後者は火繩銃「マスケット銃」(mosquet) を持っていた。従ってヌーリー集団とは、「tofangchi (Toufangchis)」と火繩銃と「ゴウ用語と装備の一致から、シャーの "Gholams-Toufangchis" を模した、ホセイーン・フリー・ミールザーの近衛兵であると考えられる。

さて近衛兵集団を率いて来たヌーリー家の人々は、地方政庁内でのどのような活躍をしたのだろうか。最も情報量の多いモハンマド・ザキー・ハーンの動向を中心に調べてみる。既に述べたようにモハンマド・ザキー・ハーンは、ファールスに来てしばらくすると、御前ゴラームの地位を得た。一二三〇／一八〇八年、ジョーンズやモリーアらがペルシア湾岸のブーシェヘルに到着すると彼は *mehmandar* に任命されたが、この時の身分も御前ゴラーム [FN 1, 68]、又は特別御前ゴラーム (*gholam-e pishkedmat-e khasse*) [FS IX, 45] と記されている。メフマーンダールとは、外国使節など要人の警護、宿泊や食糧の調達などの便宜を図る役職である。彼はメフマーンダールとして一行をブーシェヘルから先導し [Jones, 44; *Morier* 1, 42, 69, 99-100]、ホセイーン・フリー・ミールザからジョーンズへの贈答品を届け [*Morier* 1, 72-73]、一行と地方政庁との間の連絡係を務め [*Morier* 1, 97]、一行のホセイーン・フリー・ミールザや高官訪問に同行し [*Morier* 1, 107, 111; *Jones*, 98, 119]、自らも宴に招待した [*Morier* 1, 118]。モハンマド・ザキー・ハーンはこのファールスでのメフマーンダールに、一二二五／一八一〇年にマルコム一行が来た時 [FN 1, 703]、一二二六／一八一一年にウーズリーらが来た時にも任命された。以後しばらく情報は途絶えるが、その間にモハンマド・ザキー・ハーンは政庁内で力を増していたと推測される。イギリス側の史料に拠れば、一八一七年末現在、ホセイーン・フリー・ミールザは *Masqat* のイマームと共に *Bahrayn* を攻めるためシーラーズを空けており、この遠征でモハンマド・ザキー・ハーンはファールス軍の指揮官 (*sardar*) として登場する。翌年三月までにホセイーン・アリー・ミールザはシーラーズに帰還したが、間もなくモハンマド・ザキー・ハーンは *Moghu* 遠征に派遣された。ペルシア語史料から、今回も彼はファールス軍の指揮官 (*sardar*) で、ヌールの統兵が戦闘に参加したと考えられる。そして一年半から三年半後、彼は地方政庁内で知事に次ぐ地位である *vazir* に就任、ファールスから追われるまで〔次章第三節参照〕数年間在職した。なおモハンマド・ザキー・ハーン以外では、シヨクローラー・ハーンが一八二七年の初め、ブーシェヘル知事になったホセイーン・アリー・ミールザの王子 *Nushirvan Mirza* のワジールに任命され、モハンマド・ザキー・ハーンの息子 *Mirza Na'im* が課税台帳の監査 [ ] (*mohasebat-e*

daftari) に携わった [FN II, 978]。このようにファールスのヌーリー家の中心的人物モハンマド・ザキー・ハーンは、近衛兵の実質的リーダーから出発し、地方政庁内での地位を昇り詰めたのである。

次にモハンマド・ザキー・ハーンが地方政庁内で有した影響力を検討する。55に拠ると彼はワジール就任以前から「宮廷 (darbar) のワジールたちをえ、その仕事において彼の好意 (taqarib) を氣遣い、彼の意向 (khat-e khwah) に反した言動はできなかった。」 [IX, 717] FN にも「ファールス地方のワジールたちの任免権を掌中に握っているような、政府宮殿 (dargāh-e farāmahārāh) の側近 (moqarab) になって、去る数年の間に、短い期間でワジールを解任し別の人を就任させた程であった」 [I, 740] と記されている。イギリス人たちはどのように描いているだろうか。一八〇八年末から翌年にかけてファールスを旅したジョーンズは「地位のある貴人 (a nobleman of rank)」 [Jones, 44] と記し、メフマーンダールである彼が一行に接近すると、護衛の騎兵と一行の全ての gentlemen に出迎えに行かせた [Jones, 44]。一行の中にいたモーリアも盛装した護衛、大勢のペルシア人と共に彼を出迎えた [Morier I, 69]。一八一一年に訪れたウーズリーも「高位の貴人 (a nobleman of high rank)」 [Ouseley I, 257] と記し、シーラーズ滞在中に「町の数人の有力者 (some great men of the city) を儀礼的に訪問」したが、その一人がモハンマド・ザキー・ハーンであった [Ouseley II, 192-193]。この訪問の後シーラーズでは、当時のワジールが穀物を独占し価格高騰を招いたため暴動が発生、住民は宮廷前に押しかけた。この時群衆を鎮めるために姿を現したが、モハンマド・ザキー・ハーンであった [Ouseley II, 209-210; Morier 2, 102-103]。またブーシェルの Resident との交渉にあたるのは通常ワジールだが、一八一九年一〇月二五日付けの文書に拠れば、ワジール就任前のモハンマド・ザキー・ハーンがそれを行っており、ワジールを凌駕していたことが窺える。⑤ このようにモハンマド・ザキー・ハーンはワジール就任以前から政治的に有力であった。ではワジール就任後はどうか。イギリス東インド会社派遣の使節に同行した Fraser は一八二二年の記述で、彼は「実際にはファールスの支配者 (the ruling power of Fars) であった」 [Fraser, 102] と記し、シャーの娘婿であるカージャール族の者が彼の地位を狙って画策した噂 [102]

フレイザー一行のメフマインダールがその地位の獲得のため彼に二百トマン渡した事実を伝えており [105]、彼の地位は多大の利益と人事への影響力を伴ったことがわかる。

ではモハンマド・ザキール・ハーンの昇進、権力の獲得はなぜ可能だったのか。その一因はホセイン・アリー・ミールザーとの関係にある。モハンマド・ザキール・ハーンは近衛兵を率いる御前ゴラームであるから、もともとホセイン・アリー・ミールザーに極めて近い立場にいたが、RSに拠ればワジール就任前、既に「王子のもとで完全な信用を得て、仲間たち (aqan) に妬まれ、イランで有名になった。」 [X, 717] 一方イギリス人の旅行者は、彼のこのような立場を寵臣という語で表現する。例えば一八〇八年からの旅の記録で、モリアは彼をホセイン・アリー・ミールザーの「大寵臣 (a great favourite)」 [Morier 1, 42] と、シヨーンズは「王子の寵臣 (favorite of the Prince)」と述べる。そして後者がホセイン・アリー・ミールザーに謁見した時、そのそばに立っていたのは三人の寵臣、即ちグルシヤ人 Eusooof Beg [Yusof Beg]、当時のワジールの息子、そしてメフマインダールのモハンマド・ザキール・ハーンであった [Jones, 100]。モリアは一八一年の旅行記でも「ファールス知事である王子の寵臣 (favorite)」 [Morier 2, 45] と書いている。さてホセイン・アリー・ミールザーとモハンマド・ザキール・ハーンないしヌーリー家との密接な関係は、彼のワジール就任後、両者が婚姻関係で結ばれ一層明白になる。まず一二四〇—一八二四—五年か翌年モハンマド・ザキール・ハーンは、父母共にホセイン・アリー・ミールザーと同じ、つまり父親にフマツァン・アリー・シャー、母親に Badr Jahān Khānom を持つ Seiyed Begim Khānom Handam al-Soltān と結婚した。⑧ 続いて一二四二—一八二六—七年、シヨクローラー・ハーンがホセイン・アリー・ミールザーと「大臣」 [ワジール] モハンマド・ザキール・ハーンとの関係を「う記す」。

王子は軟弱でだらしない性格の人物 (a person of weak and debauched character) で、支配には向いていなかった。大臣は自分の手で政治を牛耳れるように、できるだけ王子の不節制を黙認し、助長していると言われていた [Fraser, 102]。

本節ではヌーリー家のファールス地方政庁内での地位、ホセイン・アリー・ミールザーとの関係について考察してきた。ファールスのヌーリー家の中心的人物はモハンマド・ザキー・ハーンで、近衛兵集団を率いる側近・寵臣である彼は、この立場を背景にワジールをも凌ぎ、ついに自らワジールの地位に就いた。そしてヌーリー家はホセイン・アリー・ミールザーと婚姻で結び付く一方、モハンマド・ザキー・ハーンは彼を意のままに操り、実質的なファールスの支配者となっていたのである。

### (3) モハンマド・ザキー・ハーンと中央政界

前節ではヌーリー家、特にモハンマド・ザキー・ハーンの家系をファールス地方政庁での動向を検討したが、本節では彼の立場をより明確にするために、彼と中央との関係を検討する。なおファールスで活躍した他のヌーリー家の人々についても考察すべきであるが、史料上の制約から、本節での考察対象は彼に限られる。

次章で詳述するが、モハンマド・ザキー・ハーンはワジールに数年間在任した後ファールスを追われた。そしてテヘラーンへ赴き、シャーの特別御前ゴラーム (gholām-e pishkhedmat-e kuāsse) となり側近の一人に列せられた [RS IX, 725]。だがモリーアは、既にファールスのワジールに就任する一〇年余り前、彼がホセイン・アリー・ミールザーと「テヘラーン宮廷」双方にとり「大寵臣 (a great favourite)」であると記し [Morier I, 42]、ファールス滞在中からシャーに信任されていたことを示唆する。

モハンマド・ザキー・ハーンはファールスではワジールにまで昇進した。このワジールという地位は、本来シャーに代わり知事を監視し、地方から中央への確実な税の納入を図ることを任務とする [本章註⑧]。ここでワジールとしてのモハンマド・ザキー・ハーンと中央との関係を考えてみる。ファールスを去りテヘラーンで特別御前ゴラームとなった彼は、ファールスからテヘラーンへの税の納入の混乱を報告し、それを解決するため、シャーにファールス行幸を勧めた [FN I,

740-741]。この行幸は一二四五／一八二九一三〇年に実行されたが [FN I, 741-742; RS IX, 721-725]、それ以前に彼自身が、シャーに再度ファールスのワジール及び指揮官に任命され派遣されていた。この時、彼はファールスの遊牧部族に妨害され、シーラーズまで行けずに引き返したが [RS X, 731]、その任務はファールスからテヘラーンへ税を納入させることであったと考えられる。その後一二四五／一八二九年、彼は今度は Kerman 知事のもとのワジールに任じられるが [RS IX, 725]、間もなく病没した。以上の事実から、彼は中央の利益の代弁者であり、ホセイーン・アリー・ミールザーという特定の王子との結び付き以上に中央との結び付きが強く、中央にとってワジール本来の機能を果していたと考えられる。

ここで本章全体の考察を総合し、モハンマド・ザキー・ハーンの政治的立場を考えてみる。ホセイーン・アリー・ミールザーと共にファールスへ来る以前の彼の活動は知られておらず、要職に就いていた形跡もない。しかしファールス滞在中、追放後を通してシャーに信任されていた。ファールスから中央への税の納入の混乱とは、ワジールである彼の失政である。それにも拘わらず彼は中央での信用を失わず、再びファールス統治の任務に起用され、この任務の遂行に失敗すると、今度はケルマーンのワジールに任命される。このように彼の活動の背景には、中央で築かれている確固とした信用が認められる。それはいかにして築かれたのか。ここで我々はアサドッラー・ハーンの、アーガー・モハンマド時代からの中央政界での活躍を思い起こさねばならない。アサドッラー・ハーンの中央での動きと、ヌーリー家のファールスでのそれとが連動した具体的事例は見いだせない。しかしモハンマド・ザキー・ハーンのファールスでの活躍期は、アサドッラー・ハーンが軍の財務担当の高官あるいは長官として活躍した時期に当たる。モハンマド・ザキー・ハーンらヌーリー家の人々は、アサドッラー・ハーンが中央で築いた信用を背景に、近衛兵集団を率いてホセイーン・アリー・ミールザーに同行するよう命じられたと考えられる。そしてモハンマド・ザキー・ハーンは王子の側近という立場を基点に地方政庁内で昇進し、「軟弱でだらしない」王子を差し置き、中央の利益の代弁者としての任務に励んだのである。

① ヌールはカスピ海沿岸部では東の Amol、西の Kojin 地方に括まれ、トルシ語史料ではロジニールと共に Nūr va Kojin とどう表現で出ることが多い。Rabino に拠れば、ヌールは二三の地域に分かれていた[32]。一方 Adamec 1976 に拠れば、ヌールは大まか三つ、細かく一四に分かれていた[49]。同書に拠るヌールのノミヤは北緯三十六度一分、東経五一度四八分におり[Adamec 1976, 85]、Rabino の付属地図のヌラヂもこれにあたるか考えられる。尚 Rabino は岡崎正孝氏の御厚意により、その蔵書を利用して写すことができた。

② 小牧昌平氏の次の論文でも、ヌール征服の年代は不明とされている。「ホセイ・コロー・ハーンの叛乱一七六九—一七七三—カージャール朝成立前史についての一考察——『ネリヒン』第三巻第一号(一九八八)四六。「一八世紀末イランの諸群雄——カージャール朝前史の基礎データ——』『上智アジア学』第八号(一九九〇)八二。

③ フーガー・モハンマドの弟 Redā Goli Khān が離反し、やはり彼の弟で、その右腕である Ja'far Goli Khān と、ヌール及びロジニール付近で戦った。ヌールの人々は前者側として参戦して敗れ、ヌール及びロジニールはジャブファル・コロー・ハーンに征服された[RS IX, 140-142; MN III, 1383; TM, 32b-34a]。同地方の有力者はフーガー・モハンマドの甥と称し、その地を政治的地位を有していた者たがは賜衣を穿せられた[RS IX, 142]。TM は小牧昌平氏が British Library から取り寄せられたものを利用をせよとした。④ 一〇二〇—一七八七—一七八八年、フーガー・モハンマドの従者 (molazem) の Bāger Solih-e-Nūr なる人物が、フーガー・モハンマドのもとからイーザンダラーンへ逃亡し、彼のもとに反乱者が集結したが、すぐ鎮圧された[RS IX, 211; TM 93a-94a]。

⑤ ヌーリー家の祖先はイーザン派の二ノイーム派における第八代イームの弟子 (morid) の、モハンマド・サキー・ハーンや Asad Allah

Khān の曾祖父は財を築き、Rostandar [本章註の参照]、イーザンダラーン、Gilan の有力者となり、サマワウー朝の Shah 'Abbas 二世に厚遇され、息子や孫たちもロスタムダールを統治したり、サマワウー朝や Nader Shah に人材を提供した、と記されている。

⑥ FN に拠れば、彼はフーガー・モハンマドに任せ「相応の敬意 (etebār-e iāyeq) を受けて暮し、信任と信用のある地位 (amāl-e vohūq va etemād) に就き、恩顧の対象 (mourad-e enāyātā) になった。」[II, 975] 但し具体的な役職名は FN に記されていない。

⑦ Le Strange はロスタムダールは Shārd 河の上流に広がる地方であると説明しているを [G. Le Strange, *The Lands of Eastern Caliphate*, repr. New York, 1976, 374]。その語の指す範囲は時と共に変化した。その変遷は Rabino を参照。同書に拠れば、ロスタムダールとは最終的に、西境を Kalār rostāq 地方と Tonekabon 地方との境界にある Namakābrūd 河とし、南北をアルボルズ山脈の分水嶺とカスピ海に囲まれた地域になった[26]。これに従うとロスタムダールとはカラルロスターク、ロジニール、ヌールの三地方を合わせた地域を指すことになる。しかし RS や FN ではヌールとロジニールを合わせた地域をロスタムダールと言っている [例えば RS IX, 181; FN I, 628]。

⑧ RS に拠れば、彼はサマウー朝の英王 Karīm Khān の没後 Esfahān を中心に朝を唱えた 'Alī Morād Khān-e Zand の命令により、同地で人質として過していたが、アリー・モラド・ハーンの死後、Astarābād に来てフーガー・モハンマドの Iashkarreis になった [X, 367]。アリー・モラド・ハーンの死は RS では一八九八年とされているが [IX, 189]、前後の関係より一八九九年の誤りであると考えられる。FN でも一八九九年である [I, 630]。これに対し NT に拠れば、一八九八—一七八三—一七八四年のザンダ朝軍のイーザンダラーン



進政後、「兵士たぎりの手綱」(zenam-e lashkariyan)を任せるため、アーガー・モホンマドは彼を vazir-e lashkar の地位に就けて賜衣を与え、彼の進言によってアスタラーバード付近からイーザンダラーンへ進み、アリー・モラード・ハーンが派遣した軍を破る。その後間もなくアリー・モラード・ハーンは病没した [I, 46-48]。また Bandad 1363 に拠れば、アサドッラー・ハーンはキャリム・ハーン没後間もなく一七九四—一七八〇年にアーガー・モホンマドがイーザンダラーンに来た時、彼 gholamnevis になり、後に lashkarnevis になった [I, 118]。FN を彼は昔も gholamnevis だったと訴えるが、アーガー・モホンマドに任せ始めた時期には触れづらぬ [II, 976]。但し NT の上述の箇所は不自然に詳し。フヤトフ・アリー・シャーは一三二二—一八〇六年行政組織整備を試みた。NT に拠れば、この時アサドッラー・ハーンは vazir-e lashkar に任命されたことになってゐる [I, 147]。実際には別の人物が任命された [RS IX, 417; MN III, 1480; FN I, 692]。NT でアサドッラー・ハーンが偏重されたのは、この書物が著かれた頃、彼の子 Nasr Allah Khan が宰相であったためであろう。このことは ST の著者にも指摘されている [ST 55]。一三二二—一八〇六年の行政組織整備につづぐは Bakhash 1971, 140, Bakhash 1985, 464 Lambton 1970, 437, この整備も含めカージャー朝初期の行政に関する事論に Meredith 1971 がある。

⑨ アーガー・モホンマドは政務の多くを自分で行ったと言われているが、軍事活動と征服地の拡大に伴い、税務や軍事関係の財務の重要性は急速に増していったであろう。彼はアスタラーバードで前者のために Mirza Esmail を、イーザンダラーンで後者のためにアサドッラー・ハーンを採用した。その後、ファールスで Hajj Ebrahim を登用した以外に行政スタッフを拡大しなかった [Bakhash 1971, 139; Meredith 1971, 63]。ST ではアサドッラー・ハーンは側近達 (khavāss)

の一人であると記されている [56]。彼は行政組織を持たないアーガー・モホンマドの私的性格の強い部下として、軍事関係の財務を処理していたのであろう。尚、史料には書記 (mushī al-mamlik) の Mirza Reda Qoh Khan-e Navā'i とする人物も登場するが、アーガー・モホンマドは文書をほとんど使用しなかったと言われている [Bakhash 1971, 139]。フザー・フラー・ハーンは一三二二—一八〇六年、文書長官 (vazir-e divan-e enshā) に就任したが、それ以前の活躍は主として征服地の財産没収による [RS IX, 238; MN III, 1415; FN I, 65; NT I, 59; TM 107b-108a, 以十二二〇五—一七九〇—一七九一年、RS IX, 327; NT I, 95, 以十二二二〇五—一七九八—一七九九年]。⑩ RS IX, 620, 630, ミシカルネヴィース・ムシーシーになった時期は不明。その時期を二四五—一八二九—一八三〇年とする MN の記述 [III, 1600] は、RS のこの箇所より信憑性が疑われる。RS のこの部分に対応する箇所も含め NT では一貫して、アサドッラー・ハーンに對し vazir-e lashkar という語を用いてゐる [I, 71, 79, 85, 89, 102, 108, 147]。この語の使用開始時期、lashkarnevisbashi の関係は明確ではない。Mostofi は一三二二—一八〇六年の行政組織整備について述べた箇所を、「ミシカルネヴィース職においても同様に拡張が行われた。数人のミシカルネヴィースが加えられ、ミールザー・アサドッラー・ハーン・ヌーリーがミシカルネヴィース・ムシーシーの称号を与えられた。最終的に、この仕事を有する者を vazir-e lashkar と称した」と記す [SNZ I, 26-27]。但し、この時就任したのは別の人物。本章註⑨参照。] vazir-e lashkar の語の使用開始は Nasir al-Din Shah 時代 (二六四—一八四八年から一三二二—一八九六年まで) という説 [Bandad 1363 I, 119] があるが疑問の余地がある。RS では前述の行政組織整備の記述に vezārat-e lashkar [IX, 417], 一三二九—一八二四年の箇所を mansab-e vezārat-e lashkar が使われる

※ [IX, 630] 両藩の間の一二三八―二八二三年の記述は Laslika-nevishbashi を用い、IX, 620)。

⑩ Mirza Hedayat Allah を財務官 (mostoufi), Mirza Farh Allah を書記 (dabir) [RS X, 368], Mirza Hashem がトルコ・ペリー・シヤールの妻 Taj al-Doule のロビーニトであった [IV, 18]。最も有名な處子はナールホロマン・シヤール時代の宰相 Mirza Nasr Allah Khan であるが、フヤフン・ペリー・シヤール時代には、また顕著な活躍をしていない。尚、トルコにおけるマニールの職掌は不明。

⑪ Morier はケルマン・チキ・シヤールを mirza、その man of the pen を記し、Morier 2, 91)。

⑫ 石版本には be e'temad vohuq だが [II, 55]、活字本の校訂に従って be e'temad va vohuq と記す。

⑬ キルマスターンは以前ペンマンであったが、ザンダ朝のキャリド・ノーン時代にタムシヤールへのペンマンと併合された [FN II, 972]。キルマスターンの位置については Afzar 1353, 200, 206 を参照。FN に拠るとキルマスターンは Abd al-Maleki 族の居住地であったが、ザンダ朝末期の kalantar, Haji Ebrahim (第二章(1)で後述)の部族追放以後、荒廃していった [II, 976]。これはノーン・キルマビーームがカーシヤール朝に遷逐し、親善な朝勢力の部族をシヤールから追放した事件を指すと考えられる [FN I, 650]。以上の事実でキルマ出身者のフマールへの移住は Afzar 1353, 206-207 でも触れられている。

⑭ 同箇所に拠ると、ホセイーン・ペリー・シヤールがペリー家がシヤールにきたのは一二二三年であるが、一二二四年の誤りである。これは以上の箇所を確認する。RS IX, 361, 717; FN I, 676, 739; NT I, 107; II, 39; MN III, 1454。

⑮ Morier I, 30。但しフマールに移住した人数ではなく、ペリー

がフマールに滞在していた当時(一八〇八年)に存在した人数。

⑯ 創設されたロシア軍隊と同様との意味。

⑰ RS にタムシヤール・ノーンは「キルマ出身者の従者たちの指導者 (sarkarde-ye molazemān-e Nur) でロスタムダールの知事 (hokman) であった」 [X, 368] とだけ記され、シヤールにきたと書かれてはいるが、特に顕著な活躍が知られていない彼についての情報はない。FN の記述を採用してよいと考えられる。

⑱ Waring の旅行記には、ホセイーン・ペリー・シヤールの配下の者のシヤールへの行動について、次の記述がある。「ペラーンから彼に同行して来た軍隊と彼の従者たちが、町の中で家を得るように命じられた。そこで彼らは八から一〇の集団に分かれ、家と決めた所を、シヤールの持主を追った。」 [E. S. Waring, A Tour to Sheeraz by the Route of Karoon and Ferrozabad, repr., New York, 1973, 42]。キヤウス氏にこれをペリー集団移住時の事と記すのが [Davies 1987, 143] の記述は一八〇二年のもの、むしろその家族の移住の時期に近い。またこれをキルマ出身者の行動と断定するのは早計である。尚、同旅行記は江浦公治氏の御厚意により、蔵書を利用してやっていた。

⑳ J. Malcolm, *The History of Persia*, 2 vols., London, 1879, II, 497. マルコム氏に拠れば「一九世紀初めのシヤールの近衛兵 (royal body-guard) は約三、四千名、常備軍 (standing army) は約一万二千名、ほかにカーシヤール族がマーザンダラーンの人であった」 [Lambton 1970, 436]。

㉑ G. Drouville, *Voyage en Perse pendant les Années 1812 et 1813*, 2 vols., repr., Tehran, 1976, II, 108-110.

㉒ 食糧・飼料・燃料等は沿道住民の sirsat と呼ぶ臨時税の課税で賄われた。A. K. S. Lambton, "Land Tenure and Land Revenue

Administration in the Nineteenth Century," *Qajar Persia*, London, 1987, 84. ミヤトニ著「臨陣正素記」『ペルシヤの地主と農民』岩波書店一九七六、一五〇。Fraser, 38; Ouseley I, 259] 規定の三、四倍徴収されることもあり [Fraser, 86] のちの税の納入時に差し引かれることになりしたが、この減額は十分実行されなかった [Fraser, 88, 115-116; Ouseley I, 259]。ヌーンシャーはカーシャートの徴収を王族たる farman を持つ任務であった [Morier I, 36-37; Fraser, 113]。この職に任命されるには高位者の上納金が必要であったから [Fraser, 106-107] 財力も要した。その代償を得、そのうえ私腹を肥やすために、ヌーンダールの取り立ては厳しくなった。その様子が旅行記にはこう記されている。

⑤ Morier 2, 46-47; Ouseley I, 257. この時は、ヌーンシャーからヌーラーズ及び本藩で取上げているペンペン、ザキー、ノーンが、ヌーラーズ以降はシャーから派遣された Mirza Zaki による財務官 (mostoufi) をヌーンシャーを務めた [Morier 2, 90]。ペルシヤ語史料では両者を混同して、後者をヌーンシャーからタクシマンと一行を連たて来たこと記されている [FN I, 706; RS IX, 476]。

⑥ FO 248/38 no. 143, Bruce to Willcock, 29 December 1817.  
 ⑦ FO 248/38 no. 160, Bruce to Willcock, 14 March 1818. ホセイン・フリー・ワールザーは態度を変え、ペスカットのイームは援軍提供を拒否されたこと、多額の金銭を取られ帰った [FO 248/38 no. 164, Bruce to Willcock, 25 March 1818]。ヌーンシャーと敵対していたペルシヤ人の Attab [Urta] 族の shaykh 二人は、ホセイン・フリー・ワールザーから賜状を与えられた [FO 248/38 no. 157, Bruce to Willcock, 8 April 1818]。類似した事件が、一八一六年に起ったペルシヤ [J. G. Lorimer, *Gazetteer of the Persian Gulf, Oman and Central Arabia*, Calcutta, 1915, I, 844-845; S. B. Miles, *The*

*Countries and Tribes of the Persian Gulf*, 2nd ed., London, 1966, 322]。Urta 族はシャーハートから南へ、一七八三年頃ペルシヤを征服した。一七九九年以降、ペスカットのイームと同盟、対立を繰り返して、一九世紀初頭からワハーン派の影響下に落ちた [Lorimer, *ibid.*, 11B, 1919; Fraser, 12-13; J. B. Kelly, *Britain and the Persian Gulf 1795-1880*, Oxford, 1968, 26-27]。ペスカットの「ペータ」は sayyid と呼ばれたが [福田安志「イームとサイヤム——一八世紀イームにおける軍制の変化——」『オリエンツ』第三巻第二号（一九八九）一八一—一九九]、ここでは使用史料の用語法に従った。Kelly の著書は中国三益氏の御蔵書を利用していただき、福田安志氏からの助言をいただいた。

⑧ FO 248/38 no. 164, Bruce to Willcock, 25 March 1818. モニーはヌーラーズ南東、ペルシヤ海岸に位置する。  
 ⑨ RS IX, 553-554; FN I, 715. 遠征はワトゥーン族や Javāsem [Gavāsem] 族とつたフランスの部族と結んだモゾーの住民に対して行われた。ペルシヤ語史料ではホセイン・フリー・ワールザーも同行して、FO ではイーム援助から帰還したとされている。一八一八年三月頃、モニーから帰ったことになっている。ペルシヤ語史料はイーム援助とモニー遠征を混同しているのではないかと。Javāsem に関しては論考がある。福田安志「近代ペルシヤ湾における『海賊行為』について」『再考』『紀要』〈中央大学文学部〉第 140 号（一九九一）。

⑩ カーシャー朝時代の地方知事には王子が任命されるのが多く、そのもとにワシールが置かれた。ワシールは、しばしば幼少で赴任した知事である王子に代わり政務を執り、中央への納税と軍力提供の義務を課せられた知事を、中央に代わって監督する役目を帯びていた [S. Balhash, "Center-Periphery Relations in Nineteenth-Century Iran," *Jarman Studies* 14 (1981), 29-33; Balhash 1971, 141; Balhash

1985, 464; Meredith 1971, 66-68; Lambton 1970, 434; Lambton 1974, 392-393]。モハンマド・ザキール・ハーンのワシール就任は FN II に拠れば二二三八〇—二二二二三年である [976]。また FN I の二二四四〇—二二八一九年の記事に、彼が一〇年間占めたワシールの地位を追われたと記されているから、この箇所からは二二三四〇—二二八一九年になる [739]。しかし FO から一八一九年一〇月二五日 [二二二五年 Moharram 月六日] には、ワシールを凌駕しつつも、まだ就任していなかったことか [FO 248/38 no. 224, Bruce to Willcock, 25 October 1819]、Fraser より一八二二年一〇月二二日 [二二二七年 Moharram 月二五日] には既に就任してゐたことがわかる [102]。従って彼の就任は、おおよそこの間である。

② FO 248/52 no. 86, Stannus to Newnam, 19 February 1827.

## 二 ヌーリー家とファールスの地域社会

### (1) ヌーリー家移住前後のファールス

次にヌーリー家とファールスの地域社会との接点から、後者の状況を見ていくことにする。本章でも主として FN, RS を用いるが、ファールスの地誌である FN II では、中心城市シーラーズ、その他の地方 (boldir, pl. boldikā), 遊牧部族 (tr. pl. hat) の三範疇に分けて記述を進めている。年代記である FN I の本章に関わる箇所においても、ファールスの住民を集団として扱う場合、この分類が使われている。また RS でもシーラーズを示す "shahr" の住民、遊牧部族という表現が使用される。シーラーズ、ボルク、遊牧部族は各々、社会的・経済的基盤を異にする様々な人々を包含しているはずだが、これ以外の範疇に分類して住民集団の動向を追うことは史料上難しい。そこで本節でも、シーラーズ、ボルク、

③ ショーンズは一八〇八年二月二日、モリアは同一〇日の出来事として記しており、日付がくい違っている。

④ FO 248/38 no. 224, Bruce to Willcock, 25 October 1819.

⑤ この結婚が行われたのは FN I, 727 及び FN II, 976 ではなく二二四一年、FN I, 740 ではなく二二四〇年になっている。また FN I でも言及されている [28, 316]。メドル・ジャン・ハーンは一八二一年、フレイザーがシーラーズを訪れた時に流行していたコレラで他界した。彼女はジャンの寵愛を受け、亡くなるまで二二年間ファールスを支配したと言われている [Fraser, 83-85]。本文に述べたワシールによる没物独占の際も、ワシールの手先と彼女が協力していたと言われている [Mortier 2, 102]。

遊牧部族という分類で、本章で使用する用語に若干説明を加えつつ、ヌーリー家移住前後のファールスの状況を概観する。<sup>①</sup>

シーラーズはファールスの地方政庁所在地であるが、住民と政庁との接点に *Kalantar* が一名存在した。キャランタルとはイランの都市に広く見られる行政官で、治安維持、紛争解決、住民への課税割り当て等に携わった。任命者はシャーであるが、一般的には住民の意向が人選に強く反映する。従って当該都市の有力者が就任する場合が多い。<sup>②</sup>

シーラーズ以外のファールスの土地は六〇程のボルークに分かれており、その統治権 (*Hokumat*) には徴税権が含まれた。<sup>③</sup> 統治権保持の形態は、住民が自分の居住ボルークのもののみ保持する小規模な場合もあれば、シーラーズ在任の地元有力者や地方政庁有力者が多数のボルークの統治権を同時に保持する場合まである。次節で述べる地元有力者 *Mirza Hādī-ye Fasāri* は後者の一例である。

これに加えて遊牧部族が存在する。FN に拠れば一三三四／一八一八—一九年、遊牧部族 *Qashqāri* の有力者 *Jāni Khān* がシャーによって *ilkhāni* に任命された [FN I, 719, II, 1109]。このイールハーニーが遊牧部族の徴兵、徴税、秩序維持の任務を負った。<sup>④</sup> しかしヌーリー家移住前後の遊牧部族に関する情報は皆無に近く、地方政庁との接触方法も不明である。ファールスの遊牧部族は、ザンド朝とカージャール朝との抗争において前者側についていた。ザンド朝を倒したアーガー・モハンマドは、ファールスの遊牧部族の一部を強制移住させて力をそぎ、移住を免れたジャーニー・ハーンもアーガー・モハンマド死去まで山中に隠れていた。<sup>⑤</sup> 年代記史料である FN I や RS に遊牧部族が関与するでき事が記録されていないのは、このように彼らが弱体化させられていたためだと考えられる。

さてカージャール朝初期のファールスを論じる際、ヌーリー家のファールス移住後間もない一二二五／一八〇一年に起こった *Haji Ebrahim* の失脚に触れない訳にはいかない。彼はファールスの有力者で、ザンド朝末期、同朝からキャランタルに任命されたが [FN I, 680]、ザンド朝から離反し [FN I, 647]、アーガー・モハンマドのザンド朝打倒に貢献した。そのためカージャール朝時代になると、彼は中央で宰相 (*vazīr-e a'zam*) に取り立てられ、兄弟や息子たちは *Esfahān*

・Brag (ヤン中央部) / Kūh-e Geluye (マールス最西部) / Qom / Kashān (キラン南西) / Borūjerd / Lorestan / Arābistan (イラン西部) で知事職を得て、一族は非常に繁栄した [FN I, 680, II, 961-969]。

全国的規模で活躍した一族は地元でも強力な政治力を有した。ファールスでは一二三〇—一七九八年、知事が兄ファーフ・アリー・シャールに反乱を起こし鎮圧されたが、当時のキャラクターンタルがハージー・エブラーヒームの弟 Aqa Moḥammad Zaman であることが確認<sup>6)</sup> [FN I, 671, II, 969]。そして反乱鎮圧後、一二四〇—一七九九年—一八〇〇年のホセイン・アリー・ミールザー赴任までの短期間、ファールスではカージャール族の一人が軍事・治安を、ハージー・エブラーヒームの息子 Mirza Moḥammad Khan がファールスの税の受領及びテヘラーンへの送金を任されるといふ体制がとられた [FN I, 673]。その後ホセイン・アリー・ミールザー赴任の際、ワジールとして Charāgh 'Alī Khān-e Navā'i という人物が任命されて来た [FN I, 676]。ナヴァーイー家はアーガー・モハンマド時代以来の功臣が属する家系である。しかし、ミールザー・モハンマド・ハーンが引き続き税務全般の実権を握り、チャラグ・アリー・ハーンは名目的存在になってしまった [FN I, 680]。

こうした状況下で一二二五—一八〇一年、突如ハージー・エブラーヒームが失脚し、一族の多くの者と共に処刑された [FN I, 681; RS IX, 368-369; NT I, 111-113]。そして彼らのようにイラン各地で華々しい政治的活躍をするファールス出身者や、地元ファールスでミールザー・モハンマド・ハーンのように地方政庁内の要職、又はそれに匹敵する実権を握る人物はほとんどみられなくなった。<sup>8)</sup> 地元住民の顕著な活躍が途絶えたこの時期がヌーリー家の活躍期にあたる。では次にヌーリー家とファールスの地域社会が直接接触した事件を取り上げてみよう。

## (2) ヌーリー家とキャラクターンタル

前節で述べたように一二二五—一八〇一年ハージー・エブラーヒームが失脚したが、それに伴いキャラクターンタルも交替

した。新キャラクタータルはシーラーズ近郊のボルルクに土地を所有し、同時にそのボルルクの統治権を持つ Mirza Ebrāhim である [FN II, 1027]<sup>9)</sup>。ヌーリー家のショクロッラー・ハーンは一二三三—一八〇八—九年頃、このミールザー・エブラーヒームの娘と結婚した [FN II, 978]。

ところが一二二六—一八一二年、Haji Mohammad Hosein Khan Amin al-Doule のとりなして<sup>10)</sup>、シャーはハージー・エブラーヒームの処刑を免れた息子 Mirza 'Ali Akbar をキャラクタータルに任命した。これに対しミールザー・エブラーヒームの娘婿ショクロッラー・ハーンは抵抗したが、その様子は次のように伝えられている。

ショクロッラー・ハーネ・ヌーリーはシーラーズのキャラクタータル、ミールザー・エブラーヒームの娘婿で、ファルマーンファルマー閣下〔ホセイン・アリー・ミールザーのこと〕のもとで非常に近い立場にあった (Dā kanāle qorb manzelat dāsh) ので、ミールザー・アリー・アクバルのキャラクタータルの地位獲得を妨害した。ファールス地方の物事の相談役 (Kafil) Mirza Hadī-ye Fāsā'i は尽力し、ファルマーンファルマー閣下のもとで、シーラーズのマハッレ (街区) の人々を招集し、各人がミールザー・アリー・アクバルとミールザー・エブラーヒームのうちからキャラクタータルを定めるようにと決めた。シーラーズのマハッレの人々が列席すると、〔彼らは〕心底からミールザー・アリー・アクバルがキャラクタータルになることを求めているとわかった。そしてファルマーンファルマー閣下は、まさしくその会議で、シャーのファルマーンに署名し、適切な賜衣 (khe'āri-ye layeq) を与え、彼をファールス地方のキャラクタータルに任じた [FN I, 708]<sup>11)</sup>。

こうしてショクロッラー・ハーンの意に反し、アリー・アクバルがキャラクタータルの地位を得た。ハージー・エブラーヒーム失脚以後、ファールスでは強力な政治力を持つ地元住民はほとんどいない。それにも拘わらず、この引用文から、キャラクタータルの人選の主導権はシーラーズの住民にあり、地方政庁内で勢力を伸長させつつあったヌーリー家の影響の及ばなかったことがわかる。キャラクタータルの人選には地元住民の意向が強く反映すると一般に言われているが、それがここでもあてはまる。

キャランタルはシーラーズの住民の意志が具現化した存在であるから、彼が住民の意志の取り纏め役になることが多かったであろう。しかし、ここで取り上げたキャランタルそのものに関する住民の意見の取り纏めには、前節で触れたファサーイー家のミールザー・ハーディーが重要な役割を果している。彼はいかなる人物なのだろうか。ファサーイー家は、祖先が四〇〇／一〇〇九—一〇〇九年過ぎにファールスに来て [FN II, 1038]、多くのウラマーを輩出してきた古い名家であり、恐らくファールスにかなりの土地を所有していたと考えられる。ミールザー・ハーディーの父 Mirza Jani はファールスの一〇以上のポルクの統治権を保持していた。ミールザー・ハーディー自身、父の生前から幾つかのポルクの統治権を保持していたが、一二二二—一七九七—一七八八年の父の死後、その統治権をも受け継いだ [FN I, 673, II, 929]。彼が顕著な活躍をした事例は、アリー・アクバルのキャランタル就任時以外には見られない。けれども人名録に拠れば、彼は地方政庁の財務官 (mostoufi) で、ファールスの一部の統治権保持者の任免を左右し、ファールスの名士 (ayand) に頼りにされた [FN II, 929]。「ファールスの一部の統治権保持者」とは、ファールスの名士にわられた点と考え合わせると、ヌーリー家のような外部から来て間も無い人々ではなく、ファールスの地元住民の場合を指すであろう。このように年代記に名を残すような顕著な活躍をしない人物が、シーラーズの住民・ファールスの名士の動向を左右したのである。ミールザー・ジャーニーは、アーガー・モハンマド死去までファールスの知事職にあったファトフ・アリー・シャー [「当時はハーン」] に仕えた。恐らくそのため、ミールザー・ハーディーはファトフ・アリー・シャーと親しかつたと言われている<sup>⑬</sup>が、彼の地元住民への影響力の源をシャーとの関係だけには求められない。ファサーイー家の人は中央政界に進出せず、シャーとの関係はヌーリー家の方が密接であったからである。むしろこの影響力の基盤は、ファサーイー家が昔からファールスで築いてきた社会的・経済的地位に求められよう。

以上の考察から、ファールスの地元住民の活躍が途絶えた時期でさえも、彼ら、特にシーラーズの住民の動向を直接掌握したのは、ヌーリー家ではなく、キャランタルやミールザー・ハーディーのような地元有力者であることが明らかに



なった。ミールザー・ハーディーは統治権保持者任免への影響という形で、若干地方政治に介入していた。そして一二三  
五ノ一八一九—二〇年、彼の息子とホセイン・アリー・ミールザーの娘とが結婚したので〔FN II, 929-930, 933〕、介入の  
度合いは次第に増していたと考えられる。まさにこの頃、モハンマド・ザキー・ハーンはワジールに就任したが、ヌーリ  
ー家が繁栄を極めつつある一方で、シーラーズの住民は益々彼らが掌握しにくい存在になっていったのである。

ヌーリー家はアリー・アクバルのキャランタル就任に反対する立場を取った。しかし一二三四ノ一八一—八九年頃、  
ファールスに移住して間もなく没したナスロッラー・ハーンの娘がアリー・アクバルと、また次節に述べるファールス退  
去の直前に、モハンマド・ザキー・ハーンの息子 Kheir Allah Khan がアリー・アクバルの娘と結婚し〔FN I, 740〕、ヌ  
ーリー家は新キャランタルとの結び付きを強めていった。これはシーラーズ住民のコンセンサスを得て選ばれ徴税にも  
重要な役割を果すキャランタルを通して、直接掌握できない住民を間接的に支配しようとした意図の現れなのである。

### (3) ヌーリー家の追放

ファールスへ来たヌーリー家はワジールを輩出するまでになったが、彼らを含むヌール出身者は突如ファールスから追  
放された。本節ではこの事件について考察を進める。まず追放に至る経過を RS と FN の記述で追ってみる。事件の発  
端は一人のヌール出身者が殺されたことであった。RS に拠れば、一人のヌール出身の従者 (molazem) が、ファールスの  
暑地帯 (gamsirat) からシーラーズへ向かう途中、町々 (belad) の外に夏营地と冬营地を持って遊牧しつつ窃盗や悪事を  
働いていたトルコ系部族 (tatar-atak) の者に殺害され、金銭を奪われた。その後しばらくして、RS に拠れば「一人のト  
ルコ人がヌールの男の手で」、FN に拠れば「ヌール出身者の集団が (jam'at-e Nuri) がカシユカーイー部族 (J-e Qashqari)  
の男をシーラーズで殺した。」こうして「トルコ人とヌール出身者の間の対立が表面化した。諸部族 (tāt) は都市〔シーラ  
ーズ〕に来て、合意し、ヌール出身者と争い始め、ファールスの人々も諸部族に賛同し、群衆となって殺害者〔トルコ人

を殺害したヌール出身者」を要求した。」[RS] ホセイン・アリー・ミールザーはモハンマド・ザキー・ハーンとショクロッラー・ハーンに殺害者を引き渡させようとしたが、彼らは応じなかった。そのため RS に拠れば、「ファールスの人々はこれについて恨みを抱き、事態は銃撃戦になって、すべての部族と都市民〔シーラーズの住民〕が、反ヌール出身者で手を結んだ。」また FN に拠れば、「ファールスの諸部族は群れをなし、ヌール出身者のマハッレを取り囲んだ。」事態を收拾するためホセイン・アリー・ミールザーはヌール出身者を追放せざるを得なくなり、彼らはファールスを離れマザーンダラーンへ向かった [RS IX, 718; FN I, 740]。

以上が事件の概略である。ここから遊牧部族がヌール出身者の反対勢力の主導権を取ったことがわかる。しかも FN では「ヌール出身者の集団がカシュカーイー部族の男をシーラーズの町で殺した」ことが、事態激化の経過と捉えられている。そこでファールスの遊牧部族カシュカーイーの動向、及びそれとヌーリー家との関係について調べ、事件の背景を探ってみる。

サファヴィー朝時代には既にファールスで生活していたカシュカーイーは、アーガー・モハンマド時代にはファールスの他の遊牧部族同様、歴史の表舞台から姿を消していた。しかし一三三四／一八一八—一九年、カシュカーイーのジャーニー・ハーンがファールスの遊牧部族のイールハーニーに任命され、一三三六／一八二一年、彼はホセイン・アリー・ミールザーによって、ファールスの遊牧部族間の紛争調停に派遣された [FN I, 720]。このように徐々にファールスの遊牧部族の中でのカシュカーイーの優越性、イールハーニーのリーダーとしての性格が明瞭になる。ジャーニー・ハーンは一三三九／一八三三—一八三四年に没したが、イールハーニーの地位を息子 Mohammad 'Ali Khan が継いだ [FN II, 1100-1101]。そしてホセイン・アリー・ミールザーは彼が「ファールスの諸部族の *nikhani* で、富と力を持ち、勇敢でおおいに仕えることができる兄弟たちを持っていたので、彼にも姻戚関係の名譽を賜った。」 [RS IX, 718] つまり自分の娘と結婚させたのだが、この結婚はモハンマド・ザキー・ハーンとホセイン・アリー・ミールザーの娘との結婚とほぼ同時期に行われた

[FN I, 727, II, 1101]。ここでもヌーリー家の繁栄の影で地元勢力の伸長が認められる。

さてホセイーン・アリー・ミールザーの姻戚になったカシュカイイーのモハンマド・アリー・ハーンは

力を得て、ショクロッラー・ハーンと絶えず争いあった。二人はファールスの人たちの一団を自分に従え、ひそかに、いつの時代にもあるように、ファルマーンファルマーの氣を自分の方へ引こうとした [RS, IX, 718]。

FO 248/52 もイールハーニーとヌーリー家との対立を示唆している。一八二七年、ブーシェヘルで内紛が発生、ホセイーン・アリー・ミールザーの王子 Nushirvan Mirza が派遣された。彼はブーシェヘルの政権を掌握、自分のワジールとしてショクロッラー・ハーンを任命したが、その後間もなく、イギリス側は内紛の処置についての保証をヌーシルワーン・ミールザーと、ショクロッラー・ハーンではなくイールハーニーに求めている。当時のショクロッラー・ハーンの地位は不明である。ブーシェヘルの Resident に赴任した Wilson が、モハンマド・ザキー・ハーンに一八二七年三月二日付<sup>⑤</sup>で着任報告を送っている<sup>⑥</sup>ので、また彼がワジールであったことが確認できるが、その一〇日程後ウィルソンは、「イールハン」[イールハーニー]の影響力増大と大臣ザキー・ハーンの運の衰退<sup>⑦</sup>を伝えている。そして二カ月半後には既に、「最近積もってきた屈辱と不幸から健康を損ねていると言われているザキー・ハーンにかわって、新ワジール Meerza Mahomad Ali [Mirza Mohammad Ali] が任命されている」と報告している<sup>⑧</sup>。以上の史料より、カシュカイイーを中心とする遊牧部族に支持されるイールハーニー、モハンマド・アリー・ハーンの勢力伸長の結果、ヌーリー家が追放されたとと言える。

FN に拠れば、モハンマド・ザキー・ハーンがワジールになると「モハンマド・ザキー・ハーンの覇権 (tasallot) によって、ヌーリー部族 (dayefe-ye Nuri) は様々な不適当なことをシーラーズの人々に対して行った。」そしてホセイーン・アリー・ミールザーの姉妹がモハンマド・ザキー・ハーンと、娘がショクロッラー・ハーンと結婚すると、「ヌール出身者たちのシーラーズの人々、ファールスの諸部族、ボルークに対する支配 (ostia) は度が過ぎ」るようになり、「ヌーリー

部族とシーラーズ、諸部族、ボルックの人々との間に殺害事件が起こり、そのうちに、双方数人が殺され、互いに復讐のために、路地やバーザールで殺し合いをしようとするまでになった。[I, 70] このように、遊牧部族だけがヌーリー家と対立していたのではなく、ヌーリー家やヌール出身者への反感は、シーラーズやボルックの住民にも広がっていた。それ故彼らは遊牧部族の動きに追隨したのである。

ではイールハーニーを初めとするカシュカリーとヌーリー家との具体的な対立点とは何か。二つの可能性が考えられる。その第一は、カシュカリーの利害とヌーリー家がファールスで得た権益との対立である。ショクロッター・ハーンは今回の追放後、再びファールスに戻るが、追放の前と後に、ファールス内の Qir o Karzin, Juyom o Bidsahar, Khonj, Afzar, Mahall-e Mamassani, Firuzabad, Sarvestan の統治権を得た [FN II, 976-977]。これはイールハーニー・イェサニを除く全てがカシュカリーの冬営地に該当していた可能性が強い [Beck 1986, 92-93]。従ってショクロッター・ハーンがカシュカリーの冬営地の統治権を追放前に保持していた場合、カシュカリーと深い関わりを持つ冬営地の住民と彼らに対する徴税権を持つショクロッター・ハーンとの軋轢が、カシュカリーとヌーリー家との対立に発展したことが考えられる。もう一つの可能性は、中央(テヘラン)対地方(ファールス)という対立の図式である。前章三節で触れたが、イールハーニーの兄弟は、追放後再びファールスへ来ようとしたモハンマド・ザギー・ハーンを妨害し、シーラーズへ入れなかった [FS, 73]。後者の任務はファールスから中央への納税であったと考えられるから、彼を通して徴税しようとするテヘランとファールスの地元勢力の一つとの対立が、事件の本質であるかもしれない。この問題に関しては、ヌーリー家追放までのカシュカリーの動向がほとんど知られていないため、結論を出すことは難しい<sup>①</sup>。

① この分類の使用は本稿に限らない。例えばラムトン氏はイラン社会を tribal group, village group, town に分けて論じている [A. K. S. Lambton, *Islamic Society in Persia, inaugural lecture delivered on 9 March 1954, School of Oriental and African Studies, 1954*].

② キャラントルに関して以下の論文がある。W. Floor, "The Office of Kalantar in Qajar Persia," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 14 (1971), A. K. S. Lambton, "KALANTAR", *ET*, Idem, "The Office of Kalantar under the Safawids and

- Afshars", *Mélanges d'Orientalism Offerts à H. Masse*, Tehran 1963. キャラントルも含めた Tabriz の行政官についての論考がある。水田正史「二九世紀タブリーズの都市行政官についての覚え書き」『日本中東学会年報』第四一巻第一号（一九八九）。
- ③ ファールスそのものの範囲が一定ではなく、カージャー朝初期に限らずホルークの正確な数を知ることは困難である。FN 及び二〇世紀初頭の史料に見られるホルークの数については Beck 1986, 65.
- ④ ハック氏によればホルークの governor 「FN の表現では hokumat を持つ者」hakem, hokumtan] の義務は taxation, law, order であるが [Beck 1986, 66]。hokumat の権利・義務の正確な規定のためには、まだ多くの事例研究が必要である。やや後年のものであるが、「一二七二〜三〇一八五三〇七年」の hokumat が徴税権・納税の義務を含むことを示す一事例を次に掲げておく。Mirza Mohammad 'Ali Khan Nezam al-Molk なる人物は、ファールスの幾つかのホルークの hokumat を持つていたが [FN I, 801]。税を年の初めに徴収せず、さしあたり自分の資本で納税しておき、年末に徴収した [FN II, 970]。
- ⑤ Beck 1986, 29. シャーニー・noon は単にカシカナイーだけのイール・noon ではなく、ファールスの遊牧部族のイール・noon ー (Ilkhani-ye Ilā-e Fars) による [FN I, 720]。ハック氏の聞き取り調査によれば、「Ilkhani」という称号はサマウイー朝時代に既にカシカナイーに与えられたと言伝えられている [Beck 1986, 52]。
- ⑥ P. Oberling, *The Qashqā'i Nomads of Fars*, The Hague, 1974, 42. Beck 1986, 71.
- ⑦ 第二章の註⑥で触れた Mirzā Redā Qolī Khan-e Navā'i の子。チャラグ・フリー・noon は彼の子と云ひ娘婿である [FN I, 691]。
- ⑧ 例外として一二三三〜一八〇八年頃ファールスのワジールに就任し

た Mohammad Nabi Khan を挙げられる。しかしキャラントルのハージー・エブラヒームと異なり、彼の政治的成功の基盤はファールスの地域社会に根差していたとは言えない。父は Basha'r の商人だが商売に失敗し、彼自身は、<sup>۱۸۵۰</sup>出身の大商人でシャーによってインドに派遣された義兄弟のもとで働き、またその死後は後継者としてインドへ派遣され財をなした。そして帰国後ブーシェヘルの支配者「恐らく統治権保持者」を経て、ワジールに就任した。インド派遣の際も、ブーシェヘルでの地位を獲得した際も、中央ギンラーズで巨額の金銭工作をしたことが知られており [Mortier I, 23]。ワジール就任時と同様であったと考えられる。このように、彼の地位は義兄弟の後継者故に得た外交上の経歴と財力に基づく。また彼の政治的成功の影響を享受した近親者としては、ブーシェヘルの支配者になった兄弟一人しか見いだせない。恐らく中央の政敵により彼はワジールから失脚させられ、間もなく没したが、その後彼の一族はファールスで顕著な活躍はしない。以上のように彼はファールスで政治的・社会的勢力を形成しなかった。彼の経歴については以下の文献を参照。

D. Wright, *The Persians amongst the English*, London, 1985, pp. 34-43. M. Roehanzamir-Dahncke, *Iran in Napoleonicischer Zeit 1797-1814*, Hamburg, 1973, pp. 58-59. Jones, 32-38. FN II, 972.

⑨ ハージー・エブラヒームの弟アーガー・モンマド・ザマンがこの時までキャラントルであったとは明記されていないが、他の人物のキャラントル就任も知られていない。FN ではキャラントルの変遷を確実に追っており、またミールザー・エブラヒームの就任はハージー・エブラヒーム失脚に伴うものであるから、アーガー・モンマド・ザマンがこの時点までキャラントルであったと考えられる。ただしアーガー・モンマド・ザマンは「一二三三〜一七九八年のファールス知事のシャーに対する反乱の際に失明させられた

ので、実質的な政務を別の人物が代行していたであろう。

⑩ アミーノッドウレはハージー・エブラーヒームの娘婿であるが、その一族の失脚によっても大きな影響は受けず、エヌフアーン知事を務め [FN I, 682; RS IX, 371; NT I, 114]、一二二〇—一八〇六年からは mostoufi al-manalek の地位にあり [FN I, 692; RS IX, 416; NT I, 147; MN III, 1480]。キジツ一二三〇—一八〇九年には、彼のとりなしでハージー・エブラーヒームの姉妹の子 [RS に拠れば姉妹の子で娘婿] の Mirza Abn al-Fasan が対英使節に選ばれ、ハージー・エブラーヒーム一族は許された [FN I, 700; RS IX, 458; NT I, 187]。

⑪ 引用箇所より「シーラーズのキャランタル」と「ファールス地方のキャランタル」は併存できないことがわかる。またアリー・アクハルはこの後、FN において「シーラーズのキャランタル」として言及されるから [FN I, 726, 740, 741]、両者は同じものを指す。

⑫ 例えば同家の一人 [一〇三〇—一六一四—一五五五] はファールスで新たに村を興じ [FN II, 1042]、一二二〇—一八世紀にミールザー・ハーディーの祖父は、荒地地になつてきたボルルク Fasa のすゑの村と農地を購入し開発した [FN II, 925]。

⑬ FN II, 926, 929. ミールザー・ハーディーは一二八二—一七六八年生まれで、ファトフ・アリー・シャール [当時ハーン] がファールス知事を辞したのは一二二二—一七九七年である。従つて、ミールザー・ハーディー自身もファールス知事時代のファトフ・アリー・シャールのもとで財務官として働いていた可能性が高い。

⑭ スルシア語史料では、この事件は一二四四—一八二八年の出来事として扱われているが、FO に拠れば一八二七年六月一日、即ち一二四二年 Dhu al-Qada 月一九日にはモハンマド・ザキー・ハーン

はワシールの席を明け渡している [FO 248/52 no. 155, Wilson to Newham, 14 June 1827]。また彼宛のワイルソンの着任報告から一八二七年三月二日、つまり一二四二年 Sha'ban 月二三日及びワシールを去つたことが確認できるから [FO 248/52 no. 49, Wilson to Zackee Khan, 21 March 1827]、解任はこの間である。FO はカーリー家のファールスからの追放を伝えているが、事件の経過からワシール解任後間もなく追放されたと考えるのが妥当であろう。

⑮ カンペカーイーの起源について定説はないが、イール・ハーニーを輩出した Shahriz 家はサファヴィー朝のシャールによりファールスに派遣されたと考えられる [Beck 1986, 48]。

⑯ FO 248/52 no. 86, Stannus to Newham, 19 February 1827.

⑰ FO 248/52 no. 45, Stannus to ? (答へのため宛先不明) 22 February 1827.

⑱ FO 248/52 no. 49, Wilson to Zackee Khan, 21 March 1827.

⑲ FO 248/52 no. 52, Wilson to Macdonald, 30 March 1827. この

時点でギンペド・キキー・ハーンが解任されたかは不明。

⑳ FO 248/52 no. 155, Wilson to Newham, 14 June 1827.

㉑ Bāndād 1363 III, 407 に拠ると、ホセイン・アリー・ミールザーは対ロシア戦後の混乱に乗じ皇太子 'Abbas Mirza や中央政府に反発したが、それに反対するモハンマド・ザキー・ハーンと齟齬が生じたため彼を解任した。しかしこの記述の典拠は不明である。また同書に拠るとホセイン・アリー・ミールザーのこの動きは、ロシア軍のタブリーズ占領以降だが [Bāndād 1363 I, 339]、占領は一二四三年 [H. Busse, "ABBAS MIRZĀ," ET AL. 木稿を考察したギンペド・ザキー・ハーンの失脚時期 [一二四二] の後である [本章註②参照]。

## おわりに

本稿ではヌーリー家の動向を通してファールスの社会状況の描写を試みた。そこです、同家が中央での信用とファールス知事の側近としての立場を背景に、地方政庁で極めて有力であったこと、中央の利益を代弁する役割を担っていたことを明らかにした。そして次に、ヌーリー家の性格・動向をふまえ、彼らと地域社会との接点から後者の状況を考察した。結論は二つに大別できよう。第一に、シーラーズやボルークの住民は、彼らだけでヌーリー家の地位を脅かす程の政治的影響力は持たなかったが、少なくともシーラーズの住民は同家の支配を唯々諾々と受け入れていたわけではない。彼らは自分達と地方政庁との結節点であるキャラクターンタルの人選にヌーリー家の介入を許さず、直接には、このキャラクターンタルやシーラーズの他の有力者の影響下にあったと考えられる。第二に、遊牧部族社会の中でカシュカーイーが抬頭し、その有力者はヌーリー家の地方政庁内での地位を脅かし、やがて彼とカシュカーイーを中心とする遊牧部族は、政治的有力者である同家を排除する程の一大勢力に成長した。地元住民掌握が脆弱であるにも拘わらず、ヌーリー家が地方政庁の有力者としてファールスに留まっていたのは、ハージー・エブラーヒーム一族のような政治的に有力な地元住民が不在であったためだと考えられる<sup>①</sup>。従ってヌーリー家追放は、そうした状況に終止符を打つ事件として捉えることができる。

本稿では地方政庁の有力者を通してファールスの地域社会を見るという方法を取ったが、両者の関係は大まかにしか描くことができなかった。それは地元住民の動向に関しても、地方政庁の統治の体制やその実態に関しても、あまりにも情報が不足していることに起因する。しかし、地域社会の中でどのような人々が政治的行動のリーダーシップを執りうるかが明らかになり、また地元住民が地方政庁に対して持つ影響力の度合について、ヌーリー家を指標にしたおおよその目安が得られたと思う。

この事件ののち、追放されたヌーリー家の一部は再びファールスに戻って来る。しかし既にファールスの状況は大きく

変化していた。ここでは遊牧部族やキャランタルなどの地元勢力、ホセイン・アリー・ミールザー、地元出身の——従ってモハンマド・ザキー・ハーンとは異なる性格を有すると考えられる——ワジールが活発に活動し、本稿冒頭で触れた動乱期に向かう。この動乱期に起きた諸事件の実態や本質を究明するため、今後、本稿の考察結果をふまえ、ヌーリー家追放後の地元勢力や戻ったヌーリー家も含めた地方政庁の人々の動向、その相互関係、中央との関係等を考察していかなければならぬ。またそうした考察が、ホセイン・アリー・ミールザー以後のファールスの政治的・社会的情勢、ひいては細かく分裂しモザイクのように多様だと言われるカーシャー爾朝時代のイラン社会を理解する一助になると考えている。

- ① ヌーリー家ではなく地方政庁に関する言及ではあるが、デイヴィス氏もハージー・エブラーヒーム失脚以後のファールスの名士 (a'yan) の弱さゆえに、ホセイン・アリー・ミールザーの政庁が発展したと述べている [Davies 1987, 126]。

- ② E. Abrahamian, "Oriental Despotism: The Case of Qajar Iran,"

〔謝辞〕 註に記したとおり、本稿執筆にあたり多くの方々から御蔵書をお借りし、貴重な助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

(京都大学大学院生)

*International Journal of Middle East Studies* 5 (1974), 16, 24.  
アブラハミアンはこの論文及びそれを発展させた著書の冒頭 [Iran Between Two Revolutions, Princeton, 1982, 9-49] でイランの社会構造の特徴を述べ、カーシャー爾朝は社会の分裂を利用し、操作することによって政権を維持したと論じている。



## The Nūrī Family and the Province of Fārs in the Early Qājār Period

by

HASEGAWA Kumi

In latter half of the eighteenth century Āqā Moḥammad established the Qājār dynasty in Iran, and his nephew Faṭḥ ‘Alī Shāh succeeded him after his death. The province of Fārs, the southern part of Iran, had been in disorder since the struggle between the Qājār dynasty and the Zand dynasty. But at the end of the century Ḥosein ‘Alī Mīrzā, Faṭḥ ‘Alī Shāh’s son, became the governor of this province and held this post for more than thirty years.

The disorder in Fārs seemed to have come to an end with Ḥosein ‘Alī Mīrzā’s arrival. But in the last years of his rule, politically serious events occurred one after another and Fārs fell into confusion again. It is necessary to study the political and social circumstances in Fārs before the confusion in order to understand this new period. However, the scarcity of historical sources imposes some difficulties.

It is well known that the Nūrī family accompanied Ḥosein ‘Alī Mīrzā, and one of its members gained considerable power in Fārs. I attempt to depict the state of the local society of Fārs through the activities of this family. First, I try to make the status of the family in Fārs clear by analyzing its general character in the Qājār dynasty, its activities in the government of Fārs, and the relationship between the center of the dynasty and the family in Fārs. Second, I try view the state of the local people in Fārs through incidents in which the Nūrī family interacted with them.

As a result the following points become clear. The Nūrī family was influential because they had the confidence of the center of the dynasty and were close to Ḥosein ‘Alī Mīrzā. But the population of Shīrāz, the center of Fārs, was not securely under the control of this family. It was a man whom the people themselves elected who assumed a position as *kalāntar* and served as intermediary between the people of Fārs and the government. The people of Fārs were directly under the *kalāntar*

and other influential local persons. Meanwhile, the Qashqā'i tribe became powerful among the tribes of Fārs and a member of this tribe threatened the status of the Nūrī family within the government. At last this tribe gained such great power as to be able to drive away the Nūrī family.

## The Formation of Local Government Finance in Sichuan during the Late Qing Period

—guilds and *lijin*—

by

YAMAMOTO Susumu

From the Jiaqing period (1796-1820) on, as the central government became increasingly short of funds, the local government authorities, which had no independent sources of revenue of their own, began to pay attention to the commercial tax. The government of Ba 巴 county (comprising the city of Chongqing) in Sichuan had already since the Qianlong period (1736-95) been collecting a fee called *chaiwu* 差務 from merchants to defray local administrative expenses, but it took advantage of the imposition of a tax known as the *junchai* 軍差 for the suppression of the White Lotus rebellions to strengthen and regularize the practice. From the Xianfeng period (1851-61) on the *chaiwu* was absorbed into the *lijin* surcharge, and the hitherto unofficial local finances became somewhat institutionalized.

The merchants strengthened their organization in order to prevent unfairness in the *chaiwu* tax burden and tax evasion. It was the so-called *bang* 幫 that handled these functions. *Bang* were lower branches of guilds organized for collecting *chaiwu* and *lijin* through brokers; from these, *shanghui* 商會 were formed from the late Qing on. Thus the guilds, which were originally associations of merchants from the same regions, came to participate in the local administration (which depended on the *lijin* surcharge) in addition to their original functions of preserving order in the business world and arbitrating disputes. Through the institutionalization of local government finances and the introduction of the merchant class into local administration, a new regional governing structure was constructed in Sichuan.